

Title	日吉以後：1980年代から現在までの光景
Sub Title	A memoir of a teacher at Hiyoshi, Keio University since 1980s
Author	小野, 修三(Ono, Shuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 (The Hiyoshi review of the social sciences). No.24 (2013.) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小野修三教授退職記念号 特別寄稿
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20140331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特別寄稿

日吉以後——1980年代から現在までの光景

小 野 修 三

1. はじめに

1980年12月13日付の朝日新聞に「死刑囚、初の再審」「29年ぶり無罪に道」「免田事件で最高裁決定」といった見出しの記事が見える。「昭和23年暮れ、熊本県人吉市内で祈とう師一家四人が殺傷された『免田』事件で、死刑が確定しながら無実を訴え続けてきた免田栄・元被告（五五）＝福岡拘置支所監＝の第六次再審請求の特別抗告審を審査してきた最高裁第一小法廷（本山亭裁判長）は、十二日までに、『証拠の新規性及び明白性を認めて本件再審請求を認容すべきものとした原決定の判断は、正当として認できる』として、福岡高裁の再審開始決定を支持して検察側の特別抗告を棄却する決定を下し、関係者に通知した」。そして「今回の決定は第一小法廷の本山、団藤重光、藤崎万里、中村治朗、谷口正孝の五裁判官の一致した意見である」と。

私はこの「免田事件」が起こった「昭和23年」に生れ、最高裁第一小法廷による「検察側の特別抗告を棄却する決定」が下された「1980年」に塾商学部近代思想史担当教員（助教授）として採用された。「免田栄・元被告」が死刑囚として確定したのは昭和26年ということで、それ以来「29年ぶり」という時間の長さだったが、事件発生以来であれば32年ぶりと言える。私も1980年の誕生日で32歳であった。日吉での教員生活を開始する際、この冤罪事件と自分の年齢をこのように重ね合わせて意識していたわけではなかったが、この新聞記事を切り抜き、リヒトというメーカーのファイルに他の記事と共に再読出来るように保管していた。

本年度で定年退職となる私は、本年度の講義でもしばしば新聞記事を引いて説明しているが、この習慣は日吉着任当初からのものだったようである。1980年4月から始めた日吉での一般教育科目・近代思想史の講義ノートには同年5月の韓国「光州の事態」¹⁾に係わる記事が糊付けされていた。この『日吉紀要社会科学』第24号は、編集委

1) 1980年5月27日付の朝日新聞は「米に失望—韓国反体制派」「なぜ全斗煥支援」などの見出し

員会（松原彰子教授、長田進教授）により私の退職記念号と銘打って頂く光栄に浴したので、本稿ではこうした新聞記事やその他の資料を引用して作成した講義ノート、短文のうち、1980年代以降の日吉に係わるもので、かつ基本的にデータベース化されていないものを紹介し、私のビブリオグラフィーを兼ねた特別寄稿（回想記）とさせて頂きたいと思う。データベース化されているものに関しては、国立国会図書館サーチなどで参照頂ければ、幸いである。

2. 1980年代

1981年4月から日吉で始めた一般教育科目・政治学の講義ノートには当時の鈴木善幸首相が1981年1月26日から4月2日までの期間に面会した人たちを朝日新聞「動静」欄を切り抜いて、その面会した人の種類、頻度を調査し、どんな人間関係の中で政権運営が行なわれているかを明らかにし、その分析結果を講義のなかで受講者に伝えた。鈴木首相が最も頻繁に面会していた（朝日新聞「動静」欄に最も名前が挙がっていた）のは宮沢喜一内閣官房長官であり、翌1982年12月に刊行された『現代社会学研究』創刊号に、宮沢喜一の著書『社会党との対話—ニューライトの考え方』（講談社、1965年）なども参照して「首相との面会者—1981年度予算編成期に鈴木首相と面会した人々—」²⁾を寄稿した。同紀要発行者の石坂巖商学部教授からは朝日新聞「動静」欄だけではなく、他の新聞の同種の記事も参照すべきだと批判された。その批判を踏まえて、より説得力のある論文に仕上げて行くことを何故怠ったのか、今ではよくわからない。なお、日吉オープンフォーラム（HOF）の第13回例会（1982年4月30日午後4時半、日吉新研会議室）で私は「首相との面会者から見た日本政治の動向分析」との発表を行なっていて、同ニューズレターに発表要旨³⁾が載った。HOF運営の実務に

で、「韓国の反政府の人たちの米国に対する考え方が、光州の事態を契機に変化しつつあるようだ。尹潽善元大統領らの『民主主義と民族統一のための国民連合』は二十六日、『なぜ米国は全斗煥を支援して、無実な良民を殺傷させるのか』と強い調子で米国に警告した」と報じていた。

- 2) 「首相との面会者—1981年度予算編成期に鈴木首相と面会した人々—」、『現代社会学研究』現代社会学研究会、創刊号1982年12月、13～19ページ。
- 3) 「首相との面会者から見た日本政治の動向分析」、『日吉オープンフォーラム（HOF）Newsletter』No.5、1982年10月、8～9ページ。なお、このHOFでは第29回例会（1986年7月9日）でも「主観性の政治学の試み—〈時〉をテーマにして」との報告を行ない、『日吉オープンフォーラム（HOF）Newsletter』No.10、1986年10月、11～13ページに例会報告として記載された。

携わったことはないので詳しいことはわからないが、間瀬啓允先生が財政面（会費徴収）を担当されていたことは確かである。

1982年6月、当時新任者だったためと思われるが、「塾と塾生を結ぶ新聞」たる『慶應義塾大学報』の4・5面の「各学部」欄に寄稿を求められ、「きだみのるを読む」⁴⁾を書いた。きだみのるとの縁は、1976年から2年間助手として勤務した立教大学法学部時代、基礎文献講読にて高畠通敏先生がきだみのる著『につぼん部落』（岩波新書）を取り上げて、日本社会の基底的小集団への参与観察を行なう人類学者の姿を、そうした学術用語を用いずに、新1年生に説明して下さる教育現場に助手として（私にとっては実質的に再度の大学院時代として）参加させて頂いたことに始まっていた。寄稿した文章のなかにはそうした経緯は記していないが、私は商学部の研究会Ⅰ（現在の総合教育セミナーに相当）で何度も『につぼん部落』を取り上げ、立教大学法学部基礎文献講読を日吉で再現していた。知的所有権侵害であり、高畠先生にはこの場を借りてお詫びとお礼を申し上げねばならない。

また通信教育部補助教材の『三色旗』には1982年には2度も、すなわち9月号「こよみ」欄に「夏休みの昆虫採集」⁵⁾を、そして12月号「随想」欄に「定職に就くこと」⁶⁾を執筆させてもらった。数年に一度有るか無いかの執筆依頼のはずだが、どうしたことだったのだろうか。いずれにしても9月号の方は沢田允茂先生による写真と解説によって紹介された「働く学生たち」欄の航空官制技術官当時の浜市宗一さん（法学部乙類32期生）と並んで拙稿が掲載されており、大変嬉しかった。浜市さんは通信教育で知り合った最良の友人である。また『三色旗』1983年9月号「塾生書架」欄には「近代思想史の基礎文献」⁷⁾を寄稿した。

1980年代の日吉キャンパスでの教員の動向では、上記の日吉オープンフォーラム（HOF）の他に、慶應義塾大学・大学生生活懇談会が主催する「知の共同体を求めて」のことを記さねばならない。手元には二枚のチラシが残っている。一枚は年度が明記されていないが分量がA4判で4枚になるもので、もう一つは1987年と明記され、分量がA4判で2枚のものである。前者にはこうある。すなわち、

4) 「きだみのるを読む」、『慶應義塾大学報』第17巻第3号、通算132号、1982年6月1日、5ページ。

5) 「夏休みの昆虫採集」、『三色旗』第414号、1982年9月、1ページ。

6) 「定職に就くこと」、『三色旗』第417号、1982年12月、6ページ。

7) 「近代思想史の基礎文献」、『三色旗』第426号、1983年9月、20～25ページ。

「この企画は教員・学生のカリキュラム外の知の交流をめざしたもので、さまざまな知を教員・学生が同じキャンパスに住む住民として分ち合うことを目的としたものです。内容は下の表のとおり、読書会、研究会、語る会、映画会などさまざままで、それぞれの教員が現在知的に関心のある事がらを専門分野にとらわれずに皆さんに提供したものです。具体的な活動内容は個々のグループの自主性にまかされていますから、それぞれのグループで呼びかけ人である教員と集まった学生諸君のあいだで決定してゆくものといえるでしょう。このキャンパスの中で、何かをじっくりと考えてみたい人、何かを語ってみたい人、何かを試みてみたい人、—そうした諸君にとって素材となるものが、またひとつの場が、ここにあるはずです。多くの学生諸君の積極的な参加を期待しています。」

「内容は下の表のとおり」とある、その4ページに亘って続く表には26名の担当教員の氏名、テーマと形式、第1回目時場所が記載されているが、私の名はなく、1987年の小さなチラシに記載された11名の教員のうちには私の名もあった。その個所を引くと、

「小野修三 もう一つの明治維新：明治初年の草莽の志士群像に迫る。読書会形式で、高木俊輔『それからの志士』（有斐閣選書）、長谷川伸『相楽総三とその同志』（中公文庫）などを読み、また関東近辺の史跡をたずねたいと思っている。」

第1回目時場所は5月27日（水）5時限、26番教室であったが、学生は集まらなかったと思う。しかし、私には講義と研究会Ⅰがあって、講義で同趣旨の事柄を語り、また研究会Ⅰの参加者と、先のきだみのるであれば、八王子市郊外の陣馬山麓の「にっぽん部落」を歩いていたので、同僚たちからどう見られていたかは不明だが、自分自身としては「知の共同体を求めて」を実践していると思っていたはずである。

ところで、日吉に着任当時、私の所属する社会科学部門を構成していたのは矢崎武夫（医学部・都市社会学）、伊藤喜栄（経済学部・地理学）、松村宏（商学部・社会学、思想史）の三先生で、数年して矢崎先生は定年退職され、藤田弘夫（医学部・都市社会学）先生が着任、また伊藤先生も数年して神奈川大学に移られ、高木勇夫（経済学部・人文地理学）、松原彰子（経済学部・自然地理学）の両先生が着任されて、計5名

の態勢であった。先任教員の矢崎、伊藤両先生は抜けて、もう一人の先任教員松村宏助教授（当時）がおられたが、右も左もわからない新任助教授の私が何も引継もなく社会科学部門主査となり、1983年12月20日付の次のような要望書に4部門主査の一人として名前が出ることになる。すなわち、

「要望書 58. 12. 20 / 慶應義塾大学 塾長 石川忠雄殿 / 一般教育委員会委員長 箕輪秀二 / 部門主査 立野清隆 永戸多喜雄 小野修三 古崎敬 / 日吉問題検討委員会、およびその後の一般教育委員会の討議の過程において、専攻別研究紀要の刊行が強く要請されましたが、その後各部門、部会ごとに討議した結果、つぎのような結論に到達しました。／ 1. 日吉キャンパスにおける研究教育の一層の振興を計るための諸活動の一環として、各部門、各部会を基盤とした研究紀要を刊行する。／ 2. このことによつて、所属学部、学会のいかにかわらず、すべての専任者に大学紀要に論文を発表する機会を提供する。／ 3. 新紀要は、各部門、部会を基礎とするが、同時に部門間相互の交流により、一般教育課程所属の教員、研究者の組織を活用し、学際的研究の発展をも目指すものである。／ 4. 本来、大学の紀要は、研究発表の機関であつて、学生向けの啓蒙手段ではない。したがつて、その刊行に要する経費は、大学そのものの予算によつて賄われるべきである。／ 上記の内容をご賢察の上、然るべく大学当局が英断をもつて可及的、すみやかにわれわれの希望に沿うべく、対処されんことを強く要望します。／ なお、新紀要発行に関しては人文、自然、社会、語学の各部門、各部会の代表者会議が組織されており、それぞれの単位において、具体的計画の立案に取り組んでいることを申しそえます。」

この要望書の提出日（昭和58年12月20日）に、箕輪秀二一般教育委員会委員長より次の文書が部門主査宛に発せられた。「別紙要望書」とは勿論上記「要望書 58. 12. 20」のことである。すなわち、

「先般来お話し合いをして参りました新紀要刊行の件につき西村（皓）理事の要請に応え別紙要望書を提出致しました。よつて部門構成者各位にこの旨しかるべく御伝達賜りたく存じます。以上」

結果的にこの要望書は答えられず、これを受けて抗議文（昭和59年2月10日）、再度の要望書（昭和59年2月14日）が慶應義塾長石川忠雄殿宛に提出された。何が問題で交渉が進捗しなかったのかは、この抗議文、また再度の要望書を読んでも良く分からないが、実際に何が起こっていたかは、再度の要望書の一節から判読出来ると思われるので、前後を省略してその個所のみ引用しよう。すなわち、

「（前略）研究紀要発行に関する要望書への学務担当常任理事の回答（昭和59年1月27日口頭で一般教育委員会委員長に回答、1月31日電話で回答内容を確認、翌2月1日に至って、理事側が昭和60年以降の予算措置について、前日確認したばかりの項目を削除するよう申し出、さらに2月8日開催の日吉専任教員緊急集会に出席の上、学務担当常任理事の資格において出席の教員に回答の内容を直接説明することを確約）をめぐる2月8日開催の日吉専任教員緊急集会は、当該理事の破約退席という事故により、所期の目的を達成することができませんでした（後略）。」

この「当該理事の破約退席」という事態を受けて、「二月八日集会呼びかけ人一同（立野清隆・小野修三・古崎敬・永戸多喜雄）」が3月1日付で次の文書を発した。すなわち、

「去る二月八日の教員集会の決定により、抗議文（二月十日付）と要望書（二月十四日）を塾長宛に提出しましたが、要望書に対する文書回答の要請期限までには、ついに文書による回答に接することができませんでした。／なお、塾長の要請により、二月二十七日、一般教育委員会委員長箕輪君が前委員長大橋君とともに塾長と会見、その席で、塾長から、卒業式当日の三月二十三日（金）、午後一時から二時間、西村理事同道の上、日吉専任教員各位と直接話し合いをいたしたい、ついては一般教育委員会委員長の名で、専任教員集会を設定してほしいとの申し出がありました。われわれ二月八日集会の呼び掛け人としましては、当日参会下さった方々に上記の事情経過をご報告申しあげます。」

筆者の手元に残る印刷物はここまでであり、昭和59年（1984年）3月23日卒業式当

日の午後1時からの塾長と日吉専任教員との話し合いに出席した記憶がなく、また当日交わされたはずの合意事項に関する書類も手元がないので、以下はまったくの私見となるが、この交渉を複雑にしてしまった経緯ないし原因について、自分なりの理解を記しておきたい。筆者は1984年2月21日付で法学部のT先生の求めに応じて、この日吉紀要問題に関する事情説明の書簡を執筆しており、その写しが手元にあるので、その主要部分を若干長いが引用しておこう。すなわち、

「1. 紀要が問題となるに至った経過——昨年12月20日付の塾長への要望書だけを見ますと、今回の紀要は日吉所属の教員の間から湧き上った要望という感じを受けがちでございますが、本年2月8日に開催されました日吉の専任教員緊急集会の席上、大橋孚前一般教育委員長は、昭和56年12月16日の日吉問題検討委員会において、塾側からの発言あるいは提案として、部門別の紀要ということが出てきたのだ、と発言いたしております。紀要はこの意味であくまでも塾側から言い出したことであるということで、その点から日吉が紀要についての要望書を出すのは筋違いになるわけではありますが、これは箕輪現一般教育委員長によりますと、西村理事からそういう文書を出してくれと頼まれたために、出したのだそうでございます。／大橋先生がおっしゃる塾側というのは、西村理事からの発言、提案ということだと思われませんが、西村理事の発想は、日吉という単位を主張するのなら、日吉という単位での紀要を出してみろ、紀要という形での日吉の学問のレベルの証明がなされれば、日吉という単位を認知してやるぞ、というようなものだったようであります。いわば日吉に対して課題を塾側が出した、というものだったようでございます。そして今回それに答える形で要望書を塾側に出したところ、まず電話連絡にて、西村理事から箕輪委員長に対して、昭和60年度以降努力するとの回答があり、これが1日後に努力するという項を取り消したいと、同じルートで連絡があったということでございます。このあたりが、本年2月14日付の要望書の冒頭に記されている点でございます。／西村理事からは恒常的な紀要の代りに、1千万円の予算で日吉開設50年を記念する日吉特集号はどうかとの提案があったと、箕輪委員長は2月8日の緊急集会の席上、報告しております。その席上、はっきりどなたがおっしゃったか記憶がはっきりいたしませんが、おそらく永戸多喜雄・語学部門主査が、西村理事は学部別という体制、あるいは枠を

くずすことへの恐れを感じ始めたとの趣旨の発言をされたと思います。たしかに、日吉からは、学部別の授業を改めるようにとの要求が出されているようでございます。／そして、2月10日に、一般教育委員会が新しいメンバーになりましてから初めて三田で開催され、その席上、昨年12月20日付の要望書に対し、西村理事はその要望のうち、1、2、3は認めるが、4は認められないと正式に回答されました。新しい紀要は、従来、日吉にて出されていた論集のための費用をプールし、そこから賄ってほしい、それでもし不足が生じたら出そう。しかし、その出す分はそれほど現実的には多くないだろう。そして、従来、論集のための予算をプールするためには、日吉は各学部長、各学会長と話し合いをしていただきたい、との趣旨の回答だったと思います。／これに対して、一般教育委員会の席上、三雲文学部長は、要望書の4にあるようなお金の出し方は、文学部がこれまでずっと主張してきたことで、いわば日吉より前に文学部だ、という趣旨の発言をされ、大島経済学部長は、はっきりこうだとは言われなかったわけですが、趣旨としては、日吉で出している経済学部の論文集は、三田学会雑誌として集めた費用で賄われているのであり、学部のお金なのだから、理事がこの金を右から左へと動かせる筋合いのものではなかろう、という発言だったと思います。／この大島学部長の発言には、西村理事は反論できず、この日の一般教育委員会は紀要問題について、これ以上の進展はなかったと思っております。なお、当日、阪埜法学部長は欠席されておりました。／2. 日吉のナショナリズム——日吉のナショナリズムという言葉を思いつきましたのは、本年2月8日の緊急集会の席上でございます。当日は、午後1時半から部門主査および各部門の紀要問題責任者の会、午後3時から一般教員を交えての会と二本立てになっておりまして、午後1時半からの方には西村理事は出席されましたが、午後3時には退席されてしまい、午後3時からの方は結局石川塾長への抗議書の提出を決めて、終えた次第でした。この後者の方の会で、とくに自然科学の一部の教員から、塾への不満が爆発いたしました。日吉が三田に対する予科であるとの雰囲気があるとか、日吉の予算と、塾全体の予算の関係が明らかにされていない、塾はいつも同じ手口で、検討だけさせておいて、それで終いにすると不満が出され、特に西村理事個人への不信、あるいは西村理事の行為は背信行為だ、という雰囲気がありました。／3. 西村理事への不信感——今回のトラブルの一つの原因は、私には、西村理事がご自分

の思い付きを、財政的な裏付けをなされないまま、日吉でさまざまな言動をなさ
て来られたことにあるように思われます。つまり、ご自分のアイデアを他の常
任理事とくに財務担当理事に相談せずに提示されてこられたのではないかと想像
される所が大でございます。そうしたアイデアは、西村理事が理事就任当初に発
表されたもののようで、それ以後の財政的な裏付けのご努力をなされて来なかっ
たのではないかと思われます。」

『慶應義塾大学日吉紀要人文科学』は1986年（昭和61年）に創刊されたが、筆者の所
属する社会科学部門の日吉紀要はそれから遅れること4年、1990年（平成2年）に『慶
應義塾大学日吉紀要社会科学・思想史編』第一号、別題「慶應思想史林 第一巻」と
して創刊された。そして翌1991年には『慶應思想史林 第二巻』、「慶應義塾大学日吉
紀要社会科学・思想史編 第二号」として刊行された。さらにその翌年の1992年には
『慶應義塾大学日吉紀要社会科学』第三号として刊行された。正確にはこの3年間は年
度ごとにタイトルの変更があったことになるが、現在国立国会図書館には（通号1）
（通号2）（通号3）と通算の号数で識別してもらうに至っている。本稿は、したがって、
その表記で（通号24）と記される日吉紀要社会科学第24号に掲載されることになるは
ずである。日吉紀要の誕生に至る「産みの苦しみ」は、少なくとも社会科学部門にあ
っては二度のそれを経験せねばならなかった。なお、この社会科学部門の紀要をめぐ
る問題では、当時の日吉紀要刊行委員会の伊藤行雄委員長に国立国会図書館収書課と
の連絡事務（1996年12月10日付文書など）で、多大なご面倒をお掛けしたことを改め
てお詫び申し上げる次第である。

商学部長藤沢益夫先生、日吉主任箕輪秀二先生の当時、日吉枠の補助180万円を頂き、
昭和60年度塾派遣留学生として1985年4月から1年間の留学生生活をウィーンで半年、
ミュンヘンで半年過ごすことが出来た。その留学生生活の時間のなか彼の地で執筆した
ものが、商学部石坂巖教授退任記念論文集に寄稿した「近代について—エゴン・シー
レとリヒャルト・ワーグナー」⁸⁾であった。好んでこの文章を書いたのではなく、留学
期間中に原稿締切が設定されていて、留学目的のオットー・ノイラートに関する成
果をまとめることが出来ず、見た絵とオペラを発端とした芸術論の試みを航空便で送

8) 「近代について—エゴン・シーレとリヒャルト・ワーグナー」、飯岡秀夫・宮本純男編『「近代」
とその開削—政治・経営・文化—』清水弘文堂、1987年、381～393ページ。

った。それならば帰国後にはオットー・ノイラートについて研究論文が書けたかと言われれば、そうはならず、帰国した1986年に書いたのは『三色旗』「いま、世界の街で」欄の「フェルメールからアシシの聖フランチェスコまで」⁹⁾であり、『塾』「私の留学生活記」欄に書いた「1985年・ウィーン」¹⁰⁾であった。

ウィーンでの生活はウィーン大学のゲストハウスを提供してもらえたが、アウエルベルガー通りの同宿舎ではたまたま商学部の菊池雅子先生ご夫妻が滞在して居られ、ウィーン大学の教員たちと共に御馳走して頂いた。なおウィーン滞在中の夏に日航ジャンボ機の墜落事故があり、ちょうど家族がこの夏休みの期間だけウィーンに来ており、家族と一緒に乗った市電の乗客が拵げた新聞にこのニュースが大々的に載っているのが見え、死傷者の数が余りにも多く、誤報だと思った。翌1986年4月には私はすでに帰国していたが、チェルノブイリ原発事故があり、その影響がウィーンに生活する人たちの上に及んでいることが報道されていた。当時ウィーンに滞在していた日本人は2011年3月11日の東京電力・福島第一原発事故で2度目の被曝を強いられたことになる。

商学部のシニアプロフェッサーでは大正11年生まれ的小林完太郎先生、昭和2年生まれの齊藤慶司先生のお姿が今なお目に鮮やかである。小林完太郎先生は御在職中の1983年に『異説 学徒出陣』（鵬和出版）を出されていた。同書の奥付には「昭和十八年十二月、学徒出陣」され、「昭和二十年八月、敗戦により武装解除、陸軍一等兵にて復員」して同年10月慶應義塾大学英文科に復学、2年後に同科卒業とあり、お話を伺って置けば良かったと残念に思っている。また齊藤先生は、私の着任した当時は研究会Ⅰ（現在の総合教育セミナー）にあつては学期の初めに第四校舎の21番教室などの大教室で担当教員が全員集合して顔見世をして、順番に一人一人内容紹介を壇上で行なっていたが、その司会役をニコニコと担当されていたことを覚えている。齊藤先生におかれても御在職中に左右田喜一郎の研究者であることを存じ上げず、お話を伺って置けばと悔やんでいる。お亡くなりになられてから遺著として『左右田喜一郎伝』（有隣堂）が1988年に出版されている。また伊丹レイ子先生は、慶應義塾大学が戦後に男女共学になった当時の第一号の女子学生のお一人であられることを存じ上げていた

9) 「フェルメールからアシシの聖フランチェスコまで」、『三色旗』第463号、1986年10月、24～26ページ。

10) 「1985年・ウィーン」、『塾』第24巻第6号、通算140号、1986年12月、30～33ページ。

ので、その当時のことをインタビューして、録音に取り、テープ起こしが完了した時点で、生前には公表は相成らぬ、とストップを掛けられ、現在その起こした原稿が見つからず、残念に思っている。お話のなかに当時女子学生用のトイレが校舎内に用意されておらず、（あるいは大変少なく）困ったということもあった。

その他1980年代の事柄では昭和59年度（1984年度）慶應義塾大学横浜市民講座にてジョージ・オーウェルの『1984年』を題材にして「1984年を考える」¹¹⁾との講演を9月8日（土）に行なったこと、また大学生生活懇談会（略称大懇）の行事で1986年10月に2泊3日で行われた「講演と見学会『大阪に福澤を、京都に新島を求めて』」¹²⁾に内山秀夫大懇委員長、坂井達朗助教授（当時）と共に大懇委員として参加したこと、1989年には『塾』「座談会」にて「課外活動 塾生はこう思う」¹³⁾の司会を学生部委員として行なったことがある。また1984年9月29日に慶應法学会大会が松阪大学で開催された際、午後2時からの研究報告で宮沢浩一先生が「アジアの少年非行」を報告され、次いで私が「バーナード・クリックの政治理論——理論・実際・実践」¹⁴⁾を担当する予定のところ、宮沢先生が遅刻され、先に私がやることになり、この縁でというのも変だが、宮沢先生と親しくお話が出来るようになったのは幸せなことであった。法務省では当時の西ドイツでの被害者救済の動きをいち早く日本に紹介された宮沢先生に大変感謝していると聞いている。

3. 1990年代

1991年5月に学生部見学会「横浜——海から陸から」¹⁵⁾を企画した。江戸幕府は開市開港交渉で東海道の宿場たる神奈川を港として開くことを迫られ、神奈川とは海を隔てた対岸に位置する漁村横浜を、長崎の出島にならって第二の出島として整備して以来の歴史があり、慶應義塾が安政5年（1858年）に始まるに対して、その翌安政6年

11) 「1984年を考える」、『慶應義塾大学横浜市民講座 講義要綱』昭和59年度、慶應義塾大学・横浜市、5ページ。

12) 「講演と見学会『大阪に福澤を、京都に新島を求めて』」、『慶應義塾大学『大学生生活懇談会記録（Ⅷ）』昭和60年12月1日～昭和62年11月30日、14～15ページ。

13) 「課外活動 塾生はこう思う」、『塾』第27巻第3号、通算155号、1989年6月、6～11ページ。

14) 「B・クリッカー政治における理論と実践」、『白鳥令編『現代政治学の理論〔続〕』早稲田大学出版部、1985年、1～37ページ参照。

15) 「見学会『横浜——海から陸から』」、『慶應義塾大学『大学生生活懇談会記録（XI）』1991年4月1日～1992年3月31日、6～7ページ。

(1859年)に横浜港は始まるとして、それぞれ2008年、2009年が150年の祭典の年となったが、2009年には私は学生部を離れていたこともあり、企画を提案することはなかった。

また1991年9月には平成3年度慶應義塾大学横浜市民講座にて「日本の福祉制度から見た世界」¹⁶⁾と題して明治・大正期の福祉行政の歴史を紹介した。レジュメのなかで中央社会事業協会の設立年を大正10年と書いたが、これは誤りで正しくは大正9年であった。私は1994年3月に慶應義塾大学より博士(法学)の学位を、論文『公私協働の発端—大正期社会行政史研究—』によって授与されるが、同論文は1994年4月に時潮社から出版した。横浜市民講座ではその分野の研究成果からいくつかのエピソードを披露させて頂いていた。なお『公私協働の発端—大正期社会行政史研究—』は大正2年以来大阪府嘱託であった当時の小河滋次郎の業績を中心とした論文集であったが、その第1章には「公私協働」において小河に先んじる笠井信一岡山県知事の業績を論じた、慶應義塾福澤研究センター紀要『近代日本研究』第6巻(1990年3月刊)初出の「済世顧問制度と笠井信一」を掲げている。同紀要論文の刊行時に、これをお読み下さった岡山県済世顧問制度の創始者笠井信一岡山県知事(大正3年から大正8年まで在職)の孫に当たられる笠井俊輔氏から福澤研究センターを經由して書簡を頂いた。近代国家の牧民官としての笠井信一知事については、歴史的資料に基いて論ずることに意義を感じていて、御子孫のことを考慮して執筆していたわけでは全くなかったが、結果的に御子孫に喜んで頂けたことは執筆者としても喜びは大きかった。

実は学位授与の2年前の1992年3月に1992年4月から翌1993年3月までのドイツ連邦共和国への「国外出張許可」を頂き、ボン大学日本学研究所客員教授として教育・研究に従事していた。今回も前回の1985年の留学の時と同じく英文の身分証明書の発行者のサインは石川忠雄塾長であった。帰国後の1993年には『三色旗』「海外の研究最前線」欄に「ツイビルディーンスト制度」¹⁷⁾を、『三田評論』「研究余滴」欄には「エルバーフェルト制度」¹⁸⁾を寄稿した。後者は小河滋次郎が大阪府嘱託として係わった大正7年の米騒動対策としての方面委員制度(今日の民生委員制度)のモデルとして有名な制度だが、エルバーフェルトはボンから鉄道で数時間の、デュセルドルフ近郊の町

16) 「日本の福祉制度から見た世界」, 『慶應義塾大学横浜市民講座 講義要綱』平成3年度, 慶應義塾大学・横浜市, 6ページ。

17) 「ツイビルディーンスト制度」, 『三色旗』第546号, 1993年9月, 18~21ページ。

18) 「エルバーフェルト制度」, 『三田評論』第949号, 1993年7月, 56ページ。

ブッパータールの一部であり、現地に足を踏み入れる機会を持った。また前者もボン大学の若手研究者にインタビューする機会があり、是非この機会に書き記しておきたいと思った事柄であった。

現在は既に姿を消した日吉の新研と呼ばれた建物には、研究室から教室に向かう際に、また教室から研究室に戻る際に少し体を休める空間が、教員談話室としてあり、専門を異にする教員の話に勝手に耳を傾け、話しに加わる余裕を教員たちは享受していたと思う。私にとっては魅力ある先生の一人が、美術の衛藤駿先生であった。その衛藤先生を講師にお願いして1995年6月に実現した大懇企画が「見学会『くらしの過去・現在・未来』」¹⁹⁾であった。川崎市立日本民家園と川崎市民ミュージアムの2か所を訪問し、見学した。とくに後者の立ち上げには衛藤先生が係わっておられ、係の方々から歓迎された。

こうした日帰りの大学生生活懇談会行事に対して、先に紹介した1986年10月に2泊3日で行われた「講演と見学会『大阪に福澤を、京都に新島を求めて』」をもう一段大規模にした企画が、1996年7月23日から26日に掛けて3泊4日で実施された「見学会『適塾と中津に青年論吉を訪ねる』」²⁰⁾であった。当時は学生部が学生総合センターへと改組され、そのもとに大学生生活懇談会が置かれていた。当時福澤研究センター副所長であった坂井達朗先生と私、それに学生総合センター課長の多田重文さんと城孝さんの計4名が引率教職員として16名の学生たちと共に行動した。大阪では適塾、中津では福澤旧邸、国東半島をめぐり、講演は坂井先生と大分県先哲史料館研究員野田秋夫さんに担当頂いた。なお、1998年12月には『三色旗』「教員紹介」欄への執筆を依頼され、国家と社会の重層構造を重ね着の比喻で説明している²¹⁾。

4. 2000年代以降

2001年11月に紀伊国屋書店のPR誌『アイ・フィール』「デジタル化時代の日本語」欄に「いい加減」²²⁾を寄稿した。小河滋次郎が明治・大正期の雑誌に執筆した文章を日

19) 「見学会『くらしの過去・現在・未来』」, 慶應義塾大学『大学生生活懇談会記録 (XV)』1995年4月1日～1996年3月31日, 7～8ページ。

20) 「見学会『適塾と中津に青年論吉を訪ねる』」, 慶應義塾大学『大学生生活懇談会記録 (XVI)』1996年4月1日～1997年3月31日, 17～19ページ。

21) 「教員紹介」, 『三色旗』第609号, 1998年12月, 29ページ。

22) 「いい加減」, 『アイ・フィール』第11巻4号, 通算42号, 2001年12月, 26～27ページ。

吉紀要に翻刻する際に、その原文紙面で使われている旧漢字を当時の雰囲気殺ぎたくない一心でワープロ上で探し、紀要原稿を作成していたが、その原則を守り通すことは出来なかった。「いい加減」を自らに許したわけだが、小河滋次郎の手書き原稿に接する機会を持った時、小河が今で言う旧字と新字を混用していることを知り、編集者ないし植字工が使用する活字を統一しているのだと思うに至った。「いい加減」で構わない、むしろ「いい加減」を許さない方が不自然だと考えるようになったという趣旨のことを書いた。

明治期には監獄行政官僚としてその職責を果たしていた小河滋次郎をめぐって、2012年2月に慶應義塾大学出版会から計7本の論文からなる論文集『監獄行政官僚と明治日本——小河滋次郎研究』を出版した。その7本の論文のうち最も古いものは1994年に執筆されており、なかなか小河の伝記を一冊の本にするという作業を進めることが出来なideいた。行政官僚という、政策実現のための権力使用を常時許された人物は、その権力使用の方法において他の行政官僚と争うことが起こり、小河の日常の細部を伝える日記、書簡といった第一次資料が本人の意図というよりもむしろ遺族（ご長男）や著作集編集関係者たちの手を通す間に選別されたり、処分されたのではないかと思わせるほど乏しい現実を前に、回り道をして同時代人によって記録された小河の姿を探し求める方針を採ることにした。

その回り道が石井十次の岡山孤児院関係の資料調査であり、石井のライバルであった加島敏郎の大阪汎愛扶植会関係の資料調査であった。その児童福祉史の分野での研究計画に対して科研費が与えられ、小河より石井、加島に係わるが多くなっていた。そして加島敏郎が明治43年に大阪から朝鮮半島に孤児院を移し、1945年8月15日以後その慶尚北道・大邱市郊外の施設「朝鮮扶植農園」がオーストリアに本部があるSOSという国際的福祉団体の管理下に移り、名称が似ているエス・オー・エスという東京八王子の福祉団体を私は2006年5月に訪問した。その訪問記を石井十次の岡山孤児院を継承する宮崎県社会福祉法人石井記念友愛社の会報に「エス・オー・エスこどもの村訪問記」²³⁾と題して寄稿した。慶尚北道・大邱市郊外の「SOS子供の村」と東

23) 「エス・オー・エスこどもの村訪問記」、『むつび—友愛社を支える会 会報』105号、2006年6月10日。なお、岡山孤児院の創設者石井十次の生涯が2004年に現代ぷろだくしょんによって映画化されたので、その映画会『石井のおとうさん ありがとう』を2004年10月20日（水）に日吉図書館地下AVホールで開催した。（慶應義塾大学『大学生活懇談会記録（24）』2004年4月1日～2005年3月31日、10ページ。）当日担当頂いた学生総合センターの服部剛久さん

日吉以後——1980年代から現在までの光景



大邱市東村駅（2006年7月現在で既に廃止）



同駅舎内の扁額「百世清風」

京八王子郊外の「エス・オー・エスこどもの村」は現在では独立した団体であることがわかったが、こうして網を広げる形で小河滋次郎研究を続けていた。

なお慶尚北道・大邱市郊外の「SOS 子供の村」は2006年7月と2009年2月の2度に亘って訪問しているが、長沼友兄氏、安東邦昭氏に同行頂いた。また通訳は李姫姫氏にお願いしたが、最初の訪問の際にかつての加島敏郎の「朝鮮扶植農園」の農産物の

（現在は日吉学生部学生生活担当）は、この行事が台風接近中の悪天候のなかで実施されたことをよく覚えているとのことで、恐縮の限りである。

積み出し駅だったと思われる東村駅（既に廃止）の写真を取り、私の HP「小野修三の日吉研究室」に掲げていたところ、この HP を見て下さった尾張旭市在住の加藤氏から2009年8月にお手紙を頂き、その写真に写る駅長室内の壁面に掲げられた扁額に記された「百世清風」の由来を教えて頂いた。「百世清風」とは「高麗国王が中国・南宋の学者、朱子に求めた書」で、「永遠に続く清い国づくりを願う心を示したもの」とのことで、加藤氏は『サライ』1994年第13号に掲載された「サライ・インタビュー 沈壽官 薩摩焼宗家十四代」の記事等を複写して同封して下さいました。そこには「百世清風」の拓本の前に座す「朝鮮渡来陶工の十四代目」沈壽官氏の写真も掲載されていた。私の HP は商学部のサーバー上のもので、定年退職と共に閉じられることになる。2000年4月に開設しているので、今年で14年目ということになるが、HPの記事に関して、こうした好意に接したのは初めてのことであり、HP を続けて来て良かったと思っている。

また『三色旗』2003年11月号での「特集・近代日本の〈異色〉の人間像」を米山光儀、安形静男の両氏と共に執筆出来たことは有り難いことであった。米山光儀「街頭の文化学者・土田杏村」、安形静男「川村矯一郎―囚人から典獄への軌跡」、小野修三「ジャーナリスト宮武外骨」²⁴⁾の三部作である。

そして『三色旗』への最近の寄稿に2007年9月号「生まれ故郷」²⁵⁾と2013年12月号「辻豊・土崎一『ロンドン―東京五万キロ』」²⁶⁾がある。後者は編集部からは「教員が学生にすすめる本」とだけ言われていたので、受け取り方が違っていたようで、同僚教員たちは教科書に類する本を挙げていた。私だけ自分自身の思い出深い本のことを書いてしまっていたが、前者はまさに私の小学校の頃のことを書いたものだった。本稿は「日吉以後」と題したが、私の「日吉以後」は「日吉以前」の光景と断絶したものではなかったようである。

5. おわりに

前述の通り、私の商学部のサーバー上の HP「小野修三の日吉研究室」は2000年4月に開設しているが、それより1年半ほど前に「国家と社会」研究会が日吉キャンパス

24) 「ジャーナリスト宮武外骨」, 『三色旗』第668号, 2003年11月, 16～21ページ。

25) 「生まれ故郷」, 『三色旗』第714号, 2007年9月, 1ページ。

26) 「辻豊・土崎一『ロンドン―東京五万キロ』」, 『三色旗』第789号, 2013年12月, 35～37ページ。

の校舎（旧研会議室）で始まっていた。後には研究室（来往舎3階社会科学合同研究室）を利用したが、第28回（2008年4月26日）で止まっている。解散したわけではない。その足跡を最後にここに記し、再開へのドライブとしたいと思う。なお、これまでに報告を頂くチャンスのなかった方々に北澤信次、徳地昭男、三尾章子、加藤俊一などの研究会メンバーがおられる。

「国家と社会」研究会報告

第1回目	1998年11月21日	報告者・小野修三	「明治20年代初頭の『警察監獄学会雑誌』を通して見る小河滋次郎」
第2回目	1999年6月19日	報告者・矢野健治	「小河滋次郎の民間事業構想」
第3回目	1999年10月9日	報告者・松田隆行	「福井準造の社会政策思想」
第4回目	1999年12月4日	報告者・米山光儀	「石田新太郎と成人教育協会」
第5回目	2000年1月22日	報告者・安形静男	「犯罪対策における公衆参加—その歴史的展望—」
第6回目	2000年4月22日	報告者・小野修三	「若き日の小河滋次郎」
第7回目	2000年7月22日	報告者・篠崎恭久	「小河滋次郎の救済事業思想—『救恤十訓』を中心に—」
第8回目	2000年11月25日	報告者・長沼友兄	「児童保護史100年」
第9回目	2001年4月7日	報告者・小野修三	「小河滋次郎の未発表の原稿『救貧要論』について」
第10回目	2001年7月21日	報告者・篠崎恭久	「小河滋次郎『救恤十訓』再考」
第11回目	2001年10月13日	報告者・安形静男	「原胤昭の生涯と足跡—その出獄人保護事業を中心として」
第12回目	2001年12月15日	報告者・小野修三	「言論人の火種—小河滋次郎は志を変えたのか」
第13回目	2002年3月30日	報告者・山梨あや	「明治末期から大正中期にかけての社会教育構想—井上友一の『自治民育』と読書政策を

			視点として―」
第14回目	2002年 6 月22日	報告者・長沼友兄	「徳川幕政期にみる欧米社会事業情報」
第15回目	2002年 9 月28日	報告者・安形静男	「明治の死刑廃止論と小河滋二郎」
第16回目	2002年12月21日	報告者・梅森直之	「植民地主義と近代日本：警察・監獄制度を中心にして」
第17回目	2003年 2 月 1 日	報告者・安形静男	「戦時下更生保護の一局―思想犯保護観察をめぐる若干について―」
第18回目	2003年 7 月 5 日	報告者・Tanya Maus	「児童保護―石井十次をめぐる―」
		報告者・長沼友兄	「19世紀イギリスの児童保護事業の動向」
第19回目	2003年11月22日	報告者・小野修三	「ジャーナリスト宮武外骨」
第20回目	2004年 6 月 5 日	報告者・小野修三	「岡山孤児院大阪事務所の日誌を翻刻して」
第21回目	2004年11月20日	報告者・小笠原慶彰	「林市蔵について―唯一の伝記の批判的検討から」
第22回目	2005年 8 月27日	報告者・小野修三	「大阪汎愛扶植會から朝鮮扶植農園へ―加島敏郎と朝鮮」
第23回目	2005年11月19日	報告者・永岡正己	「戦前期日本・朝鮮・台湾・満州社会事業の史料分析を通して―私の研究史」
第24回目	2006年 4 月15日	報告者・梅森直之	「＜変奏する統治＞―『岩波講座 帝国 日本の学知』第1巻（2006年）に寄せて―」
第25回目	2006年 8 月26日, 27日	報告者・長沼友兄／小野修三	「加島敏郎の人と業績」
第26回目	2007年 6 月23日	報告者・小野修三	「岡山孤児院・石井十次と大阪

日吉以後——1980年代から現在までの光景

- | | | | |
|-------|-------------|----------|--|
| | | | 汎愛扶植会・加島敏郎の比較」 |
| 第27回目 | 2007年11月17日 | 報告者・大友昌子 | 「『帝国日本の植民地社会事業
政策研究—台湾・朝鮮—』
(2007年) をめぐって」 |
| 第28回目 | 2008年4月26日 | 報告者・長沼友兄 | 「明治三十年代東京での院外
『感化事業』—共済慈善会によ
る島嶼への児童派遣—」 |